(英和語羅馬字對譯挿入)

A translation to the English from the Japanese containel.

女學雜誌

驛遞局認可　明治十九年一月廿三日　毎土曜日發兌　第六號

此の繪の説明ハ本紙中ニ在り

The Engraving illustrated in ano thgeer pa.

東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　發行所　績文舍

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學叢誌第六號目次

●女學叢誌を讀●本邦の史を修むる諸士に望む●學校游戯●西洋謎●數學のプッザルス●和英羅馬對譯●平政子の批難●細川忠興の夫人〔承前〕●スミッスの傳〔承前〕●表壽傳〔六〕魯國の烈女ウェラ、サシユリッチの話し●体術●雅言略解〔承前〕●和歌の心得●圖畵〔承前〕●御歌會始●根問葉問●閑散●儒者●無筆の虎●徒然草●信夫摺●舊苔の袖●二十日草●筆のまに〳〵●内外雜報數件

明治十九年女學叢誌毎土曜日發兌表

一月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
二月	六日	十三日	二十日	廿七日	
三月	六日	十三日	二十日	廿七日	
四月	三日	十日	十七日	廿四日	
五月	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
六月	五日	十二日	十九日	廿六日	
七月	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
八月	七日	十四日	廿一日	廿八日	
九月	四日	十一日	十八日	廿五日	
十月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
十一月	六日	十三日	二十日	廿七日	
十二月	四日	十一日	十八日	廿五日	

廣告料定則

一行二十七字詰	自一行至十行	自十一行至二十行	自二十一行至三十行	自三十一行至五十行
壹回分	八錢	七錢	六錢	五錢五厘
二回分	七錢	六錢五厘	五錢五厘	五錢
三回分	六錢五厘	六錢	五錢	四錢五厘
四回分	五錢	四錢五厘	四錢	三錢五厘

明治十九年一月廿三日

本誌代價表

壹冊	正價金四錢	此郵稅壹錢
拾冊	同金三拾八錢	同拾錢
二拾冊	同金七拾五錢	同二拾錢
三拾冊	同金壹圓拾錢	同三拾錢
四拾冊	同金壹圓四拾錢	同四拾錢
五拾冊	同金壹圓七拾錢	同五拾錢

但シ東京十五區內郵稅不申請

本舍ハ御注文有之と雖とも前金御送附無之間ハ叢誌配達不仕事に內規相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵稅共郵便爲替又ハ通運便にて御送附わらんとを希ふ〇郵券代用ハ御斷り申上候爲一郵便切手を以て代價御送附の節ハ壹錢切手にて一割增を乞郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込ミ其爲替分を本舍へ御送附可被下候

但し東京十五區內ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎女學叢譚

女學叢誌を讀む

粟屋關一

女子ハ文明の母なりとハ學者の常に口に稱ふる所なるが今日我邦女子數百万の中に幾人が此評を受て正當として愧ぬ色を有するか恐らくハ女子に斯ばかり尊とき力あるものとハ知らざるならん豈に憐れむべくも嘆くべきことならずや

抑も文明といふ語ハ國治り家齊ひ物事善美を盡せるの謂にして女子が之の母たりとハ女子ハ其の本務たる夫を輔佐し子を教育するに一も間然するところなく其職を全せば夫ハ力を外に專攻にそゝることを得て子ハ善き教訓と習慣とを受て完全なる人となり倶に與に己を利し人を益せるの事業を務むるを得て世ハ文明に赴くべくも之に反して妻たり母たるものゝ其智乏しく其徳具ハらずして其家を齊へ其子を教ゆること能ハざれば其家これより亂れ一家ハ推して一郡に及ぼし一郡ハ一縣に一縣ハ一國に及ぼし社會の景狀ハいかゞならか取も直さず古き繪に見へぬる百鬼夜行の容をなし世ハ常闇となり夫婦の道母子の道頓に絕て家庭の風儀全く敗れ社會を結合はせるの根本茲に亡びん矣斯てハ予で國の治るべき物事の善美になるべき然れば彼の佛蘭國に最初起りたる革命の變亂の左ハかり慘酷猖獗を極めしも其源を尋ぬるに他にも多かるべけれど一つにハ女子の智識道德の乏しきより來れるとぞ嗚呼女子の社會の事に關係ある此の如く大いなり誰か女子ハ奴隷もて視て可なるといふ誰か女子ハ牛馬の役を執しめて可なりといふ

女子ハそれ文明の母なるぞ

然りといへども文明の母となるにハ道あり何の事もなく容易くなるべきものにハあらず必ず幼稚より一個前の女となり人の妻となり人の母となるに足るの教育を受ずハ叶ふまじ日本の女子が文明の母とハいふ此の有難き光りを世界に得放ちて西洋の女子と踵を接へ隆を比ぶること能はざるは此等必用の教育を受しことなければなり同じ天が下に生れ色澤こそ異れ同じ女子にてありながら去とは愧かしきことならずや然しながら是れ古へよりの習慣にて男が女をバ木偶の修飾物かのやうに取扱かひて正當の教育を與へざりし罪にて強ち女子の無氣力をのみ尤むべからず偶ま之を教育するといふも彼の今川、女大學なんどいふ陳腐なる書物を讀ましむるのみなれば女子の智識ハます〳〵狹くなり心術ハいよ〳〵卑屈になりて中々

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

今の新しき世界に出て家を齊へ子を育つるなんどハ思ひもよらず夫れ元と此等の書物ハ男が己れに都合よきやう女を壓抑て氣力なからしむることのみを書立たるに女子ハ外より教訓をきく道なければ此を以て眞に去るものと思ひて自ら甘んじて男の命令に從ひて抗抵ぬを常經となし嫁りして夫の家に在るも大方ハ所謂良人を輔佐て家政を整治るにハわらで只その使役ひに供へりて枕の塵をはらひ子を生む　（以下次號）

○本邦の史を修むる諸士に望む　大松つま子

古しへに明かなる人ハ今にうとく外國の學にとめる人ハ我學に乏しきハ自然の理にして櫻桃の天色あるも梅花の清香を擅まゝにすることあたはざるが如しされどすべてもの學するハ世を裨益せんがためなりもしさもなくば萬卷の書を諳ずともなにのあひかわらん然るに今の時に當りて本邦の古史を脩めて世を裨益せんとするハ至難と云べし其故ハ如何にと云に我古史ハ未だ完備するものにわらざれば本邦の古史を脩る君等ハ第一に古史の体裁を改良する事につとめずんハ洋學の開けゆくまゝにいよゝ世にいれられざるに至らんもし世に容られば學の用またなにゝかせん何事にまれ世に從ひてうつりゆくハ自然の勢にして是を固守せんとするハこよなうをろかなるわざなりさて本邦の古史ハおほゝかに過ぎて假令ば其記事中の一項を究めんとするも數百卷の書を見ずしてハ得きはめ難し是我古史ハ未だ完備せざる故也西洋の書ハ大に完備せしもの多ければ何事も繁雜せず初學の人にもたやすくさとる事を得べしされば彼書をよむものハ勞少なくして功多く本邦の書をよむものハ之に反す加之ならず本邦に未た歷史と稱するに足るものなし六國史三鏡榮花物語等の雜書あれども是を我歷史なりとて文物の旺なる西洋人にほこる事ハならざるべし大日本史の如きハさすがに國書中にしてハ体裁よろしきも猶あきたらぬ事おほし其他當時流行する日本外史皇朝史略などいふものに至りてハ殆ど人をして二千五百餘年間戰爭にのみ日を送くりし想をあさしむかゝる書どもをもて我歷史ハ足れりといふ事を得べきか妾の斷言を要するまでにも侍らざるべしされば我古史も文學、言語、制度、法律、職官、人種、風俗、商業、工藝、農業、食貨、美術、其の他の學をもゝな史類をわのち其一部に關する一切の事を編纂し後進のものをして見やすからしめん事こそ今の時に當りて古史を脩る諸士の責任といふべけれ是妾が謹て諸士に望む所なり斯く部類を分て事實を明らかにせば遂に文明史やうのものを編纂するも甚だ難

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

きわざにはあらざるべしもしかゝる事だになくば今時古史萬卷をひもどくも徒に暗室に入りて古書舊案をさぐるに異ならざるべく亦何を以て世を稗益せん是れ大に本邦學事の盛衰に關する事なれば數ならぬ身をも顧みず聊かおもふむねをかくなん

◎歐米女學の枝折

○學校遊戯

狐月巔風樓主人重譯

學校あそびとは學校の眞似をして遊ぶ慰さみなり此の慰さみをせんとせば先づ友垣中の才女子を擇み之を女教師と定め他の童女は悉く此の教師の云ふ事を聽き書を讀手習し或は裁縫の技を爲し各自の好む所ろを撰みて之を爲すあり〔但し何れも眞似なり〕而して他の人と話しする時は必らず家の隅にて最とも靜かになすべきを命せらる是に於て各々は身自のら眞個の學校に於て勉强する有樣にて遊びなすなり然れども其爲す事は女子の爲すべきとの外は之を許さす。斯くして夫の女教師は第一番に居る童女を呼で云ふ阿ふじ姐貴女は生れつき誠に徒順で在ません何と申せバ他へ行て學校の事を惡ざまに云れたりと云り

阿藤姐之に答て先生に誰が斯る噓を告け申せしや。此時教師もし此の親指が告たりと云ば阿藤姐は否々決して左樣な事は御坐りません一体其女子〔親指を云ふ〕はかげ言を申し且つ殊に何事も辨まへる者では在ません。答ふる所ろ斯の如くならば教師は又食指を出して此の女子が申されたりと云ハ阿藤姐は此の人さし指の樣な女子は私しは信じません教師又中指を出し此の者が告たりと云ば。之に答へて先生ねかれくば其女子〔中指を云ふ〕は云ひつけて證據を示し給はれかしと云ふ次に無名指の云ふ所ろと云ば。之に答へて嗚呼彼の無名指女子は常々不勉强にして且つ噓を申すものなりと云べし。教師もし小指の語る所ろと云ば。他の童女も共に聲を揚て嗚呼無用の小指女と云べし。是よて此の遊びは一先つ終るなり而して若し教師よ向ふて答ふる者語ばつまる歟若くは其度を失なへば直ちに教師より其罰として忌嫌とを命して滑稽たるとを爲さしめ大勢の童女と之を笑ふ事とす然れども女教師に當る女子は假令あそびと雖とも能く其事柄よ意ろを用ひ他の童女をして不順序不相當の事のない樣にするを肝要とす

右は纔かに其一例を示せしのみ他に種々變更あれども之を略そ之を爲んとする者は此にて考ふべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○私の想像は如何なる者で有せうぞ
此の游戯は頗ぶる智識を發達する慰さミにして殊に其胸中に覺へある事に一層の深味を與ふる者なり之を爲んには童女相坐して一番上坐に在る者を想像の發言者と爲す譬へば其發言者他の友垣に問て。私くしの想像ところは如何なる者にやと。其次に居る童女之に答ひ夫より順に各自見込だけの答へを爲すなり。然るに發言者が何事を想像をるやは豫めじめ知れざるが故に之に答ふるに不相當又は思ひも附ぬ事を云ひ出すは勿論なり或は答ふるに貴女の想像ものは針なりとか鋼なりとか或は風に似たもの水に似よりの者とか等の詞ばを以てそれば發言者は其答の區々なるやをよく覺へ置き而て各自答へをなし終りたる後ち始めて自分の想像を咄すとぞ又皆々の答へし事の發言者の想像に似せる樣に巧みに其說明しをなすべし若し自分が答へながら其說明しの出來ざる者は即ち罰を受くるを例とす此の游戯一たび終れば次座の者發言者と入かはりて發言者となるなり其例左の如し

阿道姐曰く阿芳姐は私くしの想像ものを何と思し召ぞ
　阿芳姐答ふ　雨の如し
阿道姐曰く阿千代姐は何と思し召す
　阿千代姐答ふ　恰と花の如し
阿道姐曰く阿兼姐は何と思し召す
　阿兼姐答ふ　鐘の如し
阿道姐曰く　阿國姐貴女は次に當れり
　阿國姐答ふ　恰と梟の如し
阿道姐曰く　阿雛姐來りて答へ給へかし
　阿雛姐曰く　恰と星の樣で御坐ります
阿道姐曰く　久代姐あなたも亦た申さるべし
　久代姐曰く　私くしは恰と乾酪の樣に思はるゝ
阿道姐曰く　雨か花か鐘か梟か星か乾酪か
阿芳姐曰く私しは斯る物に似たる何物なるかを思ひ出そとが出來ません
阿道姐曰く私しの心中に想像ものは月で御坐りますぞ阿芳姐月は何ゆゑに雨と同じき者に候や
阿芳姐曰く彼の月は海の水を漲きらしむるを以てなり阿道姐貴女此事を御存じならん月は海水を自由に滿干させ而して雨の水を自在に増しむると昨年の諸新聞に於ても諸國の川々あぶれ人家を流し田畑を皆無にしたるとを故に雨は月に緣故あり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

阿道姐曰く實に貴女の仰せの如し誠によき說明しと申すべし。次の阿千代姐何故に月ハ花の如き者よ候や

阿千代姐曰く夫れ花ハ日每に變りゆく者なり月の形ちの夜々變りゆくと等しき者にれハさずや

阿道姐曰く阿兼姐貴女ハ私くしの想像とハ餘程違ひし御答なり月ハ何ゆゑに鐘に同じきか御答いかゞ　〔以下次號〕

○西洋謎

〔四〕余ハ已にありたり然しながら今あるに非ず又絕て再たびあらざるべし諸君ハ余を有すれども一も益となるとなし余ハ或人に對して親友を證し又或人に向ふてハ怨敵を證明す余又一人を拜命し又一人を免職す余或ハ童子に授くるに福祉を以てし毫しも嗟嘆を知らざらしめ或ハ童子を叱り懲して苦しみを爲さしむ若し余輩幸に逍ひ又不幸にして余離るゝを覺らバ則ハち當に語るべし諸君の久しく訣別する所の者と

〔五〕玆に一ッの物あり之に一物を納れバ其物だん／＼膨脹て大いなる者となる若し一物も納されバだん／＼縮まりて細小となる

○數學のプッザルス

〔四〕甲乙ノ二人アリ賭ヲナシテ鷄卵ヲ食シニ甲ハ其數九十九個ト一個ヲ食リ乙ハ其數百個ヲ食ツクシタリ然ルニ尙ホ甲ハ勝ヲ得タリ其故如何ン　○答

〔五〕玆ニ長サ三丈ノ布アリ每日一尺ツヽ截ニ幾日ヲ費ヤセハ其事ヲ爲シ終ルヤ　○答

◎和英語羅馬字對譯〔いろは骨牌〕

年老のひや水

（羅）Toshiyori no hiyamizu.

（英）An old man who takes cold water for his drinking
老十 人ガ十一 所ノ九 トル八 冷六 水ヲ七 向テ五 彼ノ一 飲ムコト二
and using, should not fail to hurt his health.
ソシテ三 用ユルコト四 アロウ十八 ルデ十七 誤ラ十六 コトヲ十五 害スル十四 彼ノ十二 健康ヲ十三

塵もつもれば山となる

（羅）Chiri mo tsumoreba yama to naru.

（英）Dust piled up becomes a mauntain.
塵ガ三 積ミ一 上ラレタル二 ナル五 山ト四

りちぎものゝ子だくさん

（羅）Richigi mono no ko dakusan.

（英）One fool makes many(an European old saying.)
一ノ 馬鹿者ヲ ナス 多クヲ 歐羅巴ノ 古 諺ナリ

八十九

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎内外烈女傳

○平政子の批難

俗説に云。頼朝伊豆におハしけるとき。伊東次郎祐親が女子に通ひて一男子を生り名づけて千鶴丸と云ふ。祐親國にくだりけるに此女子が繼母。之を祐親に告しらす。祐親大に驚ろき彼の男子を伊豆の松川の奥とゞろきの淵に沈にのけ彼の女子を取りへして江馬小四郎に嫁す〔曾我物語を考ふるに是ハ北條時政が子の江馬四郎義時とハ別人と見へたり〕祐親なほも怒りにたへず頼朝をも害せんとす。祐親が次男伊東九郎祐清これを頼朝に告るに頼朝おどろきて逃去り給ふ。其路次に於て八幡を祈りて曰く先祖義家が由緒を捨給ハずハ征夷將軍にいたらしめ給へ。それなほ叶ふ可らずハ伊豆一國の主となしして祐親を召捕て讐を復し侍るべしと。なく〳〵祈られけるぞいたましき。斯て後ち頼朝北條四郎時政が館に行ておハしけるが又時政が女子政子に通せらる

曾我物語曰く。時政にむすめ三人あり。一人ハ先腹にて廿一歳になり美女なり。二三ハ當腹にて十九十七になる。ともに悪女なり頼朝北條にむすめありと聞て消息を送らんとせられしが伊東にて繼母の讒ありしに懲て悪女なりともくるしからずとて。十九の女子に文を送れり。途中にて藤九郎盛長おもひけるハ姉ハ美女にて妹二人ハ悪女と聞バ始終おぼしとげん事おぼつかなし。左らバ北條にも中たがハせ給ハんとよろしかるまじとて御文を廿一の姉にかきかへ持ゆけり。むすめ返事ありしかバ頼朝しのび〳〵にかよハれけり。是よりさき。十九の妹夢を見て姉にかたりしに。よき夢なりとおもひ買とりしが。はたして途中にて文をかきかへ幸となりぬ云々

然るところ北條時政京よりくだりけるが。此事を聞て大におどろくと雖ども。いろに出さず。兼て路次にて約諾ありしかバ。國に着とひとしく。むすめ政子を山木判官兼隆につかハしける。されどもむすめ兵衛佐にこゝろざしふかゝりければ。あからさまに立出るやうにて。兼隆がもとを逃いでたり。やゝ程へれども見へざりければ。あやしみをなして尋ねもとめしかどもゆくへもしらず成にけり。そのむすめ終夜ら伊豆山にたづねゆきて兵衛佐の許にこもりけり。程なく頼朝勢を催して。山木兼隆を討ち後に伊東祐親をも亡して本望をとげ給へり〔以上源平盛衰記曾我ものがたり〕◎東鑑脫漏以政子稱神功皇后

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

再來本朝女鑑貞
一行部平政子

今按るに頼朝そでに刑餘の獨夫と成て伊豆の國に流され二十餘年の星霜を經たり元來ともに天を戴かざるの讐あれば博浪槌をわげん爲に苫に寢ね塊れを枕とせらるべき身の。わさましくも東家の牆を踰て處子を摟るのみにあらず我身の罪惡を顧りみず。還て伊東を恨さて日本を領となくバせ先て伊豆一國を領さしめ給へ。伊東に讐を復せん八幡を祈られしハ父に薄ふして婦に厚きなり不孝不義評するに及ばず又北條がむすめ政子荒淫放蕩不待父母之命。媒妁之言踰墻て相從へり。詩に士之耽兮猶可説女之耽兮不可説と賦せる類なり。それのみならずまた。山木にも

九十一

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

嫁せり。彼れ若し志ざしあるべくば。たとひ輿中に死すともなんぞ云甲斐なく二夫に見へんや。さてしもあらで又山木をも奔て頼朝にしたがひ。私夫に黨して夫君を殺させたり。乱倫の罪淺々ならんや。しかるを史に譽ともから政子が桑中臨功の穢行をわきまへず。あるひハ貞婦と書ッ神功の再來とも記せり。彼をしも貞婦と云バいつれか貞婦ならざらん

〔廣益俗說辨殘篇〕

、細川忠興の夫人〔承前〕

徃昔我父日向守殿右大臣家を弑し奉つりし刻み夫君大に其不義を憤をり給ひ汝が父ハ即ハち我が外舅なり今君を弑して天下を覦がふ之れ逆賊と云すんバあらず今若し汝ぢを逐ざれバ我の賊に與そるとの嫌ゐあるを如何せんとて遂に我を離別して丹波の三戸野に送られける我巳を得ず此處に潜居すると雖年其間村翁野嫗等皆我を目して逆賊の女子よ主殺しの兒よと罵しり辱かしめ以て嘲笑しけるがゆゑに常に憤怒に耐へず為に自殺せんとせしと其幾干なるを知ざりしが唯だ與一郎君の幼少に在る所由を以て其成長を待て宿志を決行せんと恨みを飲み血に泣おぢきなき年月を送る内徃る天正十二年大閤殿下我薄命を憐れみ夫君に仰せて再嫁なさしめ給ひにき其後殿下聚樂の散樂の砌列侯の夫人を召して陪觀仰せ附られし時我れ病と稱して命に應せず又醍醐の御宴よも亦た固く辭して赴むのざる者ハ我に於て深く謐しむ處あればなり我れ女性と雖ども常に覺悟する所ろ斯の如し今や目前に此變に遭ふ死實に昔日に似たり汝等之を思へと泰然自若として更に動ずる氣色なかりければ諸老臣もほど〳〵敬服し皆な涕泣の外なきをりしも早や敵ハ門外に迫りて發砲し彈丸雨の如くなりしかば夫人ハ莞爾として其兒に向ひ汝ぢ幼稚なしと雖ども武弁の家に生れし不幸にハ母と共に死ねよかし凡ろ武士ハ死すべき時に死なされば必らず大なる辱あるなり現に怨敵門に迫れり卑怯の擧動ある可らずと短刀ぬくより早く十歳の男子と八歳の女子を刺し殺し自から衣を以て顔を蔽ひ遂に潔ぎよく刄に伏て果たりける此時松齋之を見て今ハ思ひ置となしと火を放ちて邸を焼き自からも亦た火中に投して死でけり此役よ死する者乳女二人侍女四人其他郎黨數十名同じ枕らに死したりけれバ三成大に驚ろき諸侯の夫人皆な此の如き時ハ德川氏の為に諸侯を驅る者にして天下の禍ハひ皆な己れに歸すならんと遂に其事ハやみたり忠興ハ阿霜が齊らず處ろの絶命の詞を得て悲憤に耐へず一意德川氏に黨するとゝなり彼の關ヶ原の役に大に

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

三成と戰て之を破りしも蓋し夫人が此一死あるに由のみ嗚呼盛んなるかな

○スミッスの傳（承前）

スミッスハ友力自の最後の賴を諾なひ寢ても覺ても忘れやらず何卒して敵きを討取りて墳墓の苔の下に祭りて修羅の一念を晴させバやと是より父の獵銃を仮り受け下人一人を召具して終日彼處此處の山々溪々を渉獵しが第四日めに竟に當の敵たる狼を打留擕へ歸り阿娘の負たる傷の狀に肩と前足の肉を剝取り首打はねて其墓前に祭り左の文を讀上げて懇ろに後生を營なみしといふスミッス時に年齡十九才とか上古巴提使の臣が韓國に使して其兒の讎なる虎を討し功績にも勝さりて天晴雄々しき擧動なれと知るも識らぬも押並て感稱せぬ者ハ無かりしとぞ

ジヨン女の靈に報ず

ジヨン姐よ妾は卿の賴みを果せるぞヂヨン姐よ嘗て卿が身に慘虐なる害を與へたる狼ハ妾今日之を討とりて卿に與へたる慘虐の害を妾また狼に與へたるぞヂヨン姐よ妾ハ已に卿の最後の賴みを果したるを以て此の獰惡なる狼ハ卿の墓前に備ふ卿請ふ修羅の妄執を晴し以て地下に瞑目せられんことを

表書傳（六）

○魯國の烈女ウエラ、サシユリッチの話し

天の將に雨ふらんとするや田の面の蛙まづ鳴て然る後ち幽里の間だ雨師の蹂躪する所ろとなる國に禍災の降るや亦た斯の如くならんか此のサシユリッチの傳を著る人すべからく魯國皇帝アキレサンドル第二の弑逆に遭ひ給ひし本來を洞察し給ふべし抑も此の處女ウエラ、サシユリッチハ魯國陸軍の大尉サレユリッチの孤兒にして千八百五十六年即ハち我が安政三年カルコフ郡に生る天資至孝にして義に勇み苟且にも道に背かず去れバ天帝此の處女に賜ふに限りなき福祉を以てすべきに左ハなくして限りなき禍災を以てするハ抑々天道ハ是か非か將た斯の美名を千歲に傳ふるの美事を以て之に賜の物とするか今玆に憐むべきとの始め終りを寫し出して聊さか讀者諸君の沾巾の情を促がさんと欲す

（以下次號）

○女學

○体術

我邦學校の設けある日尙ほ淺し故に女子の体術の如きハ未

だ普ねく行なハれも否体術の樣の軟和からぬを見て何となく之を嫌ふは職なり是れ習弊の然らしむる所ろと雖とも實ハ衛生と智識の發達如何を解せさるより斯る思ひを懷くのみ我儕記者之を慨する久し故に茲に西洋の女子体術の方法を譯出して世の嚴父慈母に訴へて其習弊を弛めんとす

カリスゼニックスと稱する体術中の一法ハ最とも軟和き戯むれにして兒女輩に丁度よき者となす此の体操ハ英國の小學校中に於て普ねく用ふる所なり啻に學校のみならす常に家に居て友垣と遊ぶ時も之をなして娯し先り而して學者數人の考へ又ハ驗みし所ろに據れば凡そ尋常の体術の方法ハ甚は〻危險にして兎もすれバ患ひを生ずるとあり其譯いかにと申せハ兒女をして粗暴且勇悍大膽技に馴しむればなり然るに此のカリスゼニックの方法ハ更に危險なるとなく又粗暴にもわらす其事實を篤と調ぶるに兒女をして其筋骨を丈夫にし其運動を輕捷からし先且つ身体の釣合を程よくすれば其健康に益あると容易ならざる者とす

形輪の体術　此の体術ハ我邦の學校に於ても普通に行なふ者なり先づ最初に右の手を下に垂れ前と後に振り次に左りの手を高く上へあげて前と後ろに振り次に兩手を揃へて前の方へ差わけ次に兩手を一度に上下前後へ輪の圖を書が如く轉すなり

地上を指す大術　先づ兩手を高く上け次に身体を前の方にこゞませ務めて兩手が地に着く樣の方法を爲すべし然れども兩膝の折るを忌が故に決して兩膝を折べからず斯の如く數回するを地上を指す体術と名く

チン〱体術　此を爲にハ臂を張て兩手先を兩脇骨の上に置其大指の隱る〻樣にし足ハ爪先にて立ち而して後ち前の方後の方へとチヨイ〱と跳進み跳退くなり其樣恰かも洋犬がチン〱して歩む樣なるを佳とす其際ハ勉めて身体を眞直ならしむべし

踏歩　此の体術ハ地上を指す体術の如く臂を張て兩手を兩脇骨の上に置き其大指を隱る〻樣にし而して後ち片足を爪立てチヨイ〱と飛び片足前へ進む時ハ代つて復さチヨイ〱と飛べし斯の如く一度ハ飛び一度ハ歩み双方互に代り番にするを踏歩の体術となすなり　（未完）

○雅言略解　（承前）

（か）のごと　慨なり又些と云ふ心にも讀り○かもながら　斯もながら也○のはは な　美麗なる花○かひやが下に鳴のれず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

かひやとは山田の庵に火を薫らし煙を多くして蚊を防く也
其庵の下に鳴蛙を云○かはど　河の口とは戸と知べし○かめ
のますふ　龜の甲を焼て吉凶を見る占かたの事○かげのたれ
を　雛の尾の長きを云○からす羽にかく言の葉　傳へ云ふ
敏達帝の御時高麗より烏の羽に表を書て奉りにるに更に讀人
なかりけるが王辰爾と云ふもの其羽をむして絹に押けるに文
字うつりて讀とを得たりと是より讀がたく又は解し難き文語
をからす羽にかく言の葉と云ふ○かたぬく鹿　占ひを云ふ○
かさのかりて　かりは假初なりてとは傘に附る結にて之をて
と云ふ○かきのしりへにぬかつく　此は思はれぬ人を思ふの
詮なきとを譬へて云なり宮寺にて拝伏は常なるに垣の後へに
ぬかつくは其功なければなり

〔よ〕よもきが杣　蓬きの茂れるを杣山の茂みに見立さるなり
○よもきが嶋　蓬萊山の事○よるべ　寄邊なり○よくだる
夜の更る意○よつの船　遣唐使の乗船を云ふ大使副使判官主
典の四人乗ばなり○よしえやし　笑ふ心の義　（以下次號）

槇廼舎主人

○和歌の心得

かな〔哉〕　かなに三ッの分ちありかへる哉中の哉ふきながし
のかな是あり

かへる哉　意のかへるなり假令ば藤原よしたかの歌に

君が爲おしからさりし命さへ長くもがなと思ひけるかな

此哥の詞書に女のもとよりかへりてつかはしけるとあり後朝
の歌なるべし其心は一度あふとあらば卿が爲には命も惜く候
はすと思ひしに一度あふて見ればあかぬ心地して最前惜から
しと思ひし命も今更なかくあれかしと思ひけるかなり斯は
思はさるべきとなるをと心のかへるなる此格にて知るべし
中の哉　多くは第三句にあるかなや西行の歌に〔玉葉〕

かしこまるしての涕のかゝるかな又いつかはと思ふ愁れに

ふきなかしのかな　後鳥羽院の御製に（新古今）

櫻ちる遠山鳥のしたりおのなか〳〵し日もあかぬいろかな

云ひながして意のこらぬなり
又心にさて〳〵と打あげく様の哉あり假令は重之の歌に〔詞
花〕

風をいたみ岩打浪のをのれのみくだけて物をおもふころ哉

此外ぬる哉つる哉は共に前々よりの心こもり。ける哉は當意
の心ろあり。哉どめは総て別段のテニヲハもなく斯く云て留
ると云ふ格式もなく只だよく上よりうつりてきびしく留りた
るは一首の哥の聞へ又うつりあしゝれば殊の外尾がれに聞ゆ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

る者なり初心の哥ハ往々哉とめ留らず尾枯になるものなれば心を用ふべし

(未完)

○伊勢物語の作者

俗説辨を見しに曰く俗説に伊勢太輔ハ伊勢物語をめでたくしるして世にきこえたり今按るに伊勢物語を書しハ伊勢なり伊勢太輔にハあらず伊勢ハ宇多帝の女御なり伊勢太輔ハ上東門院の侍女なり二人を混して一人と覺へたる故なり〔近世の書に此両人を一人とせる説おほし考へ見るべし〕大系圖に據に伊勢ハ藤原内麻呂三代ノ孫大和ノ守繼蔭の女なり〔七條后宮の女房寛平法皇御息所〕伊勢太輔ハ大中臣輔經〔能宣の孫〕女なり之を以て俗説の相違を知べし

◎女紅

○つゝみの記

〔一〕紗綾ちりめん類の中に綿を入て巻たる巻物を包むには紙の上下を折かへし又それを端の所を細く折り。又それを細く折て包みて上か元下の元を重ねて上が元を右へ折かへし又それを左へ折のへせば細にひだになるなり

〔二〕板の物をつゝむには眞中にて左右の端を折のへすゞ金襴どんすの類の巻物つゝみに同じ。板の物とハ薄き板を入て平たく疊みたる織物を云なり練貫絹類の板の物なり絹ハ巻絹もあり純子も巻純子たゝみ純子ありたゝみたるハ皆板の物と云

〔一〕〔二〕の圖次號に出すを以て之を詳細にすべし

○圖畫 (承前)

畫稿を作らんとせバ見る所の風景中に於て此ぞ奇絶なりと見認る部分のみを限りて之を寫すを肝要とす而して之を寫すにハ先づ其景色を紙上に微に且つ粗に圖して後ちよく注意して寫したる樹木山水茅舎等の遠近の比例を取るを要す其比例を取る簡易の法ハ目と目に對する樹木茅舎山嶽の間に持つ所の筆を直立にし而して茅舎ハ筆の長さより低きこと何分樹木ハ筆の長さ何分と見定むれば其遠近比例ハ大凡知らるゝなり若し其樹木山嶽筆より長きと甚だしくして一度にて比例を取り兼る時ハ其樹木山嶽の茅舎より上へ出ると筆一竿の長さと其寸分を畫稿の茅舎の上に一點を下し更に筆を高くして再たび其點の上部を測るべし斯の如くすれば其樹木山嶽ハ筆の長さに倍すると幾干にして茅舎より高きと何ほど若くハ遠山の遠く沈むと何ほどと直ちに知るを得べし此れ畫稿に作るに於て最とも肝要なる事柄と爲すなり

(未完)

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

◎化粧の卷

○首筋の短かきを長く立のハす法

首筋の短かきハ襟付あしく後ろ姿の見悪き者なり又襟よ垢のつくと常並の人に勝れり心を用ひて此の法の如くすれば此等の愁ひあるとあし此の首筋を長く見そる法ハ常に肩をそばめ押さくるが如くにし顔ハ少し俯く心持よし襟ハ少こし退襟にして下へさけ髮の結様ハ髱を高くすべし首筋ハ髮際を少し剃あげ（但し髮際を剃に際立てそるハあしゝ拔あゝたるがよろし）化粧ハ髮際へ°°°°ふきこみ白粉をし其上へ常の如く化粧を高くすべし襟足ハ三本に作るを善とす

○首筋の太きを細く見そる法

肩をすぼめ首を立のべにし俯むく心持にて化粧ハ白粉ハ濃すべし白粉の濃ハ咽の太きを細く見する者なり

◎群芳詞苑

○御歌會始　御題　緑竹年久（一月十八日官報）

御製

九重の臺の竹の深みどり變らぬ影ぞめでたかりける

御歌

年々に翠そひゆく呉竹のかげこそ御代の姿なりけれ

二品勲一等　晃親王　山階ノ宮

色替ぬ御階の竹ハ大御代のいや榮ゆく兆なるらん

二品熾仁親王妃董子　有栖川ノ宮

年々に緑くそゝる呉竹ハ榮ゆく御代の兆なるらん

二品貞愛親王妃利子女王　伏見ノ宮

年毎に緑くはゝる呉竹ハ御代とゝもにや榮ゆくらん

故三品博經親王妃郁子　華頂宮

色變ぬ御はしの竹の常とはに立榮ゆべき君が御代哉

内大臣從一位大勳位公爵臣藤原朝臣實美上　三條

年を經て深くなりゆく呉竹の緑にこもる千代の色哉

侍從長正二位勳一等侯爵臣藤原朝臣實則上　德大寺

限なき千代の籠れる篁村ハ嬉しき節の數もしられず

（題者兼）元老院議官正四位勳二等臣源朝臣美靜上　福羽

年のはに榮ゆく竹の深緑つきせぬ御代の影こもるらむ

元老院議官兼式部長官從三位勳三等侯爵

臣藤原朝臣直大上　鍋嶋

憂ふしを知で年ふる御代なれや色こそ増れ園の呉竹

宮内大輔正四位勳二等伯爵

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

移し植しかの昔より呉竹の變らぬ色を見るぞ樂しき　臣藤原臣朝友實上吉井

○御伽草

○根問葉問

鶴ハ千年いきると云が眞實の事か。去ばサ生ればこそ鎌倉に賴朝の放した鶴が居るでハないか。そして千年過れバ如何するであらう。千年たてバ死のさ。死んで如何するであらう。それから極樂十万億土へ行のサ。極樂へ往て如何するであらう。ハテ五月蠅人た極樂で蠟燭立サ

學藝上の根問葉問ハ益ありと雖ども益なきとに之を爲ず可らぞ

○閑散

いざとゝれん都鳥此ら邊に遊び所ろなきやと隅田堤みを下て秋葉の方へ至りしに其路の邊に庵室をのまへ三十斗りの男たゞ一人机にかゝり書籍を讀で居る体を見るより嗚呼彼の樣にして一生を送りなバさぞ面白い事であらふと羨ましく我れ知らず佇ずみて見てゐると庵室の男ハズット起て伸をしながら嗚呼金錢がほしひ

世の中よ道こそ勿れおもひいる山の奥にも鹿ぞなくなる

○儒者

石橋を鐵の棒よて叩いて渡ると云なる極々物堅儒者先生此も學問の一ッあらんと書生を連て芝居見物せしが歸宅のうへ書生に向ひ今日多賀の大領と名乘で扮せし色白くして夫の光る源氏とも申すべき惡形ハ何と申そ姓名なりやと問れて。おれハ板東家橘と申して惡形でハ御坐りませんと云ば。ハテあれが惡人で御坐るまひか一か國の主公たる身にて寵妾に迷ひ身を放蕩に持くづし國の乱を惹起そものが所謂是れ惡人にて有まじきや

其道に由て其見る所を異にし公平ハ難きとにこそ

○無筆の洋犬

犬の嗥るとき虎と云ふ字を手に書て握つて居れば嗥ぬと御前に聞て飛だ目に逢た。ホヽウ如何して。昨夜夜更てから歸ると洋犬めがワン〳〵嗥のゝるもゑ握た手を出したら此れ如斯に嚙れた。フウ　夫ハまだ日本の字を知らぬ洋犬だらふ

日本文字を出して讀得ぬ者あに獨り洋犬のみならんや

◎机の塵

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○徒然草　本郷　大松つま子

徒然草は兼好法師の自から編るやうに思ふ人おほけれど然らず此は命松丸とて兼好に仕へし童子ありけるが此の童子兼好が死後今川了俊に仕ふ或時了俊命松に兼好が歌なとの殘れる物ありやと問けるに童子答へて此處にも侯へど多くは草庵の壁にはふれて侍ると云ひければ尋ねさせよと吉田の感心院へ命松丸を遣はし伊賀の草庵へは伊豫太郎光貞とて歌の心もありしをつかはし尋ねしに伊賀の草庵にて稍々五十枚ばかり集めたり。されば今のつれ／＼草は吉田にて多くは壁にはり或は經卷の裏などに書捨ありしを此時あつめ來りて了俊命松など取そろへ又命松が許にありしを歌一冊草紙二冊とせりこの題號なきまゝに發端の文字を取て徒然草と題せるは今川了俊にてぞありつらんと新井白蛾の牛馬問答に見えたり

○信夫摺　同じく

しのぶもちずりとは忍草をもてすりたるものなりとたれも思ふべけれど此は陸奥のしのぶもちずりと云歌より思ひ僻めたるとなり今陸奥よりしのぶずりとて出る物あるは後に附會せしわざなり續日本紀卷八養老二年五月ノ條に割常陸國之石城、標葉、行方、宇太、亙理、菊多六郡置石城國割白河、石背、會津、安積、信夫五郡、置石背國云々拾芥抄に云陸奥三十六郡白河、磐瀬、會津、耶麻、安積、安達、信夫云々さればみちのくとはしのぶの冠詞におかれたるにてもちずりといふまでにかゝれるにはあらずと知るべし地名を冠辭に用ゐたるは高砂の尾上などいへる是なり播摩國に高砂と云ふ所ありてそこにをのへといふ所あるが故に高砂のとはおきたるにておほかたの山のをのへをばなべて「高砂のをのへとよみつけたると同じ例なり高砂は山の大名なりなど云はしのぶずりを陸奥より出づといへるに同日の論なるべしと北邊隨筆に見えたり眞淵も亦この說なりき其他顯昭以來の學者は皆信夫郡の名産とせり何れかよからむ今知るべからねど或は北邊隨筆の說可ならんか

○舊苔の袖

平家物語に舊苔の袖をぬらすと書り或る人難して曰く舊苔の袖とは非なり裘帶と書べし。裘帶とは門跡方の服なればなりと

○二十日草[牡丹]

歌書に牡丹を廿日草と書り。花の盛り廿日あるゆゑに名づくといひて出所たしかならず。今按ずるに梅村載筆に曰樂天が樂府牡丹市に花開花落二十日。一城之人皆如狂と云によりて

九十九

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廿日草と云なるべし昔しハ牡丹の沙汰なし毛詩ニ芍藥の事ハあれども牡丹をいはず後世牡丹る木芍藥と名つく藥種にも用ひ花をも賞せるとハ李唐より盛んなり百家名書よハ牡丹芍藥むかしハ一つにして古人の芍藥と云ハ牡丹をもさして云なりとあるを考へ見るべし以上俗説辨

○筆のまに〳〵（四）　千束村　ときを

○紙墨作り始のこと

推古紀十八年春三月高麗王僧曇徴法定を貢上す曇徴五經を知り且つ能く彩色及び紙墨を作る云云皇國ハ原來より齋部廣成が古語拾遺の序にもある如く言葉のみにして文字無き國故紙筆墨等ハ無りしなり支那より朝鮮に傳たへ朝鮮より皇國に傳たへられし事ハ推古紀の本文を讀ても明亮あり偖支那にて紙を造り出せし人ハ後漢の蔡倫とんふ人なり傳に曰く古へより書契多く編むに竹簡を以てす其の縑帛を用ゆる之れを謂て紙と為す縑ハ貴簡ハ重く並びに人に便ならず倫乃造意樹膚麻頭及び幣布魚網を用ゆ以て紙を為り之れを奏上す。など見えたり

蘇易が簡紙譜に蜀人ハ麻を以てし閩人ハ嫩竹を以てし北人ハ桑皮を以てし剡溪藤を以てし海人苔を以てし浙人ハ麥稭稻稈を以てし呉人繭を以てし楚人楮を以てす。斯の如く昔しより紙を製するにハ種々なる材料を以てせしこと明らかなり西洋の棉紙琉球の蕉紙なども新發明とハ言ハれまじ墨ハ誰れが造り出せしが判然せずといへども竹簡變じて巻子となるの際漆書の便わしきより發明せし物ならん輟耕錄に上古墨無し梃を作り漆を點じて書す中古方さに石を以て汁を磨る云云松烟を以て膠に和し墨を造ることとハ此の如きことより考へ出せしならん

●徒然草の講義ハ紙面の都合に由て今回だけ除きませ

◎内外雜報

○處女の洋行　山川捨松子（今の大山巖君の令室）津田阿梅孃が一行の外にハ未だ聞ざる奮發と申すハ深川區清住町福岡長兵衞の娘てる子ハ齡ひ稍やく二八にして且つ小町をも欺むく天資あり性來學問を好きて曾て一昨年中ハ深川小學校に在りて高等課を卒業し其後漢學先生に就て漢籍を學び側ら洋學にも從事せしが今度內國に在て洋學を修するの迂遠なるを思ひ遂に大志を懷き來月下旬にハ外國婦人（宣教師なりと云ふ）に從かいて米國へ渡り七八年間在留して充分に修學の素志を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

貫ぬかんと目下洋航の仕度中ありとの報を得るが果して然るや否やは出帆の日にあらざれバ信しがたし

○親の心子知るや否や　目下加波山事件として審理最中なる夫の暴徒の一人小林篤太郎の老母きいが同人の辯護人嶋田助六氏へ送りたる書翰なりとて本月十三日の山梨日々新聞に掲けたるを見るに其恩愛の情言外にあふれそゞろに涕だ數行し心中を察そるに餘りありと見るからに抄錄して以て睦まじからぬ親子及び文盲不智の女の戒しめとなす

一筆申上まいらせ候御目にはかゝり不申候へども御寒さの折からます〳〵御きげん能御めで度存上まいらせ候扨悴篤太郎公判辯護御成被下候趣き有がたく御苦労に存じ上まいらせ候其後山梨新聞取寄せ御調の摸やう承知致し只今にては中止の由定めし近日の内御開きに相成候事と存候悴一昨年出立後の樣子何分不安心に存晝夜心配致し居候處昨年九月中杉戸宿より手紙參り彌々心配相まし候に付私義罷越し說諭歸宅致させ度心底にて親るゐどもへ相談致し候へども何分有かも相分らず彼處此處探し居候中萬一暴動抔之ありしては兎角の心配も詮なき事に相成候てはざん念の至りに付親類相談の上私共市川一貫近藤方策と申者同行九月廿四日愛知縣令國貞樣御邸に罷り越し前申述候心配の次第一々申上候處奇特の義に付幸ひ來る廿七八日頃には出京致すまゝ早速警保局へも相話し彼の本人儀丁年未滿にも有之親類に於ても心配の餘り拙者邸へ參り候旨話し可申間安心歸宅候樣御申聞けに付一と先安心歸宅候處圖らず暴擧の當日にて驚き入り申候右申上候ても詮方なき御事とは存じ上候へ共心類はじめ心配致し候樣子申上げ御腹案にも相成べきかと心配の餘り拙き筆をも顧りみず長々敷申上げ愛子の情に溺れ候は親の常と心ろの中御察し何分御盡力の程偏へに願ひ上げまいらせ候先は御禮かたかた前申述候次第申上度如此に御座候かしく

添ながら前願ひ上候親子の情御酌み分け心の中御察し被下御盡力の程只管願上げまいらせ候

○出產期　動物の出產にはそれ〳〵期のある者にて人間と雖とも同一の理なりとは學者の常に云ふ所なるが玆に明治十四年の事實に係る日本の出產期を調ぶるに左の如しと

●一月　一千百五十四人●二月　一千〇六十七人●三月　一千〇七十九人●四月　一千百四十三人●五月　一千〇三十七人●六月　八百八十一人●七月　九百十六人●八月　九百十四人●九月　九百〇五人●十月　九百十一人●十一月　九百〇七人●十二月　一千〇八十六人　右に由て之を見れは產出期は春冬の兩期が多き樣に思はるゝなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

驛遞局認可

廣告

●大日本教育新聞 毎日發行 廣告

本紙發行ノ目的ハ上教育令ヲ奉体シ下人民ヲシテ教育ノ欠クベカラサルヲ知ラシメ教育ノ普及ヲ謀リ世界萬國ノ教育法及ヒ各種學校ノ氣脈ヲ通シ大ニ文化ノ進歩ヲ望ムニアリ（一月廿日ヨリ發行）

●本社ハ教育擴張ノ目的ナルヲ以テ實際ノ原價ヲ以テ頒ツ故ニ此ノ如キ廉價ナルハ日本全國ニ未タ曾テ見ザル所ナリ

●一月廿日迄ニ申込ミアレハ本年ニ限リ五分ノ割引府外ハ三十日迄但シ壹万人ヲ限ル

●本紙ノ体裁ハ通常ノ新聞紙ニ異ナルヿナシ

●本社ノ役員ハ購讀者ノ中ヨリ撰擧ス

●本紙購讀者ニシテ教育上必用ノ圖書機械等ノ廣告ハ無代價ニテ諸ス但シ其原品ヲ本社ニ寄附シテ後來一ノ私立教育博物館ヲ設置スベシ

●本紙購讀者ニシテ學藝研究ノ爲メ出京シ其知己親類等ナクシテ各自好ム所ノ學校ヘ入學手續キ不了解ノ者ハ本社ニテ身元引受人トナリ万事懇切ニ世話スベシ（書生口入所ト云フガ如シ）但シ父兄親類ノ實印ヲ捺シタル依頼狀アル者ニ限ル

●本紙代價●一枚八厘●一ヶ月十八錢●三ヶ月五十三錢●半年一圓二錢●一ヶ年二圓一錢●總テ前金

●郵便税ハ毎日配達一ヶ月廿五錢　但シ數名申合セ申込ミアレバ頗ル減少ス

●記事論說奇談妙話ヲ贈ル者ヘ規則ノ謝金ヲ呈ス

●一ヶ月五回以上通信スル者ヲ通信委員トナス

●購讀者二十名以上ヲ世話セシ者ヲ擴張委員トシ本紙ヲ無代價ニテ呈ス五十名以上ハ郵税共ニ呈ス二十名以上ハ一名每ニ五厘ヲ增ス

明治十九年一月

東京々橋區元數寄屋町三丁目五番地

教育社

馬場壽先生著

小學生徒 **美容術**

全一冊定價金六錢郵稅二錢

農學士菊地熊太郎編述

○化學理論一班 全一冊

定價金二十錢　郵便稅金六錢

嶋津倉治編輯

○明治新刻 日本温古類聚 全壹冊

定價金三十錢　郵便稅金六錢

小池民次序　馬場壽著

新撰 小學遊戲書 全一冊

洋本仕立小本　挿密圖　定價金拾五錢郵稅金四錢

千葉本町壹丁目　**立貞本舎**

東京大賣捌所　**積文舎**

持主兼印刷人　松本義弘

編輯人　山田常治

發行所　東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　**積文舎**

女學叢誌賣捌所

東京芝區愛宕町一丁目三番地　大賣捌所	修正堂
同　神田區淡路町　同	巖々堂
同　神田區雉子町	團々社
同　日本橋區新葭町	辰明堂
同　牛込肴町十七番地	活神堂
區　芝區愛宕下町二丁目	高観堂
同　蠣殻町貳丁目	信文堂
同　本郷區本郷元富士町二番地	盛春堂閣田
同　同本郷春木町貳丁目	解明堂
同　元數寄屋町壹丁目	東海堂
大坂府備後町四丁目	岡嶋支店
千葉縣千葉本町一丁目	立貞舎
上總國武射郡松尾	高林銀藏
江州彦根西内大工町	新々堂
勢州津京口町	郁文堂
陸前國仙台大町四丁目	木村文助

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY